

会報

南海に ねむれる戦友よ
ときどきは、
故国にかえれ
共に語らむ…



交流を深める親睦誌
東部ニューギニア戦友会

《No. 9》

ごあいさつ

東部ニューギニア戦友会々長
元十八軍高級参謀

杉山茂

早くも終戦三十三年目の春を迎えました。昔烈な戦場を駆け廻って来た皆様だけに、したたかな生きざまでも今年も天馬空を往く勢いでハッスルしておられる、ことと思います。

顧みれば、戦塵に塗れた骨皮筋工門が破れ衣とボロボロをまとい、眼だけはギラ／＼として残んの斗志を垣間見せていたあの終戦当時の異様な形相は、今や思い出すのも容易ならぬ程遠い彼方のことになりました。今日相見のお互は、そんなドン底生活なんて夢の世界におき忘れ、打って変った小意気な紳士振りではありませんか。語ることも口角泡を飛ばしてこれが五十路の坂をとうに乗り越えた老兵などとはつゆ思われません。

食に飢えマラリや栄養失調に悩まされ、幾度か冥途の境を往来しながら戦って来た者にとつては、戦場で体験した異常の忍耐力や責任感が得難い人間形成に役立ったことは明らかで、お蔭で戦後の欠乏や圧迫にも屈せず、毅然として自立して今日の自己を構築するに至ったことも宜なる哉と思われまふ。

今や人々の意識や価値観がスッカリ変わったためか、往年の犠牲的精神や質実剛健の気風もどこへやら、利己一遍倒で他を省みないことが一般といった世の中です。口をつけば、手を拱いて不況、円高を愚痴るばかりの「甘え」一ぱいの現象が横溢しているように思えます。こんな世であつてもわれ／＼があの戦場で、補給品の杜絶えた後も残存燃弾や資材を以って新たな装備を創出したり、乏しい未知の現地物資の中から糊口の資や医療の法を

工夫したことなどを省みれば、われ／＼にとつてはこの世に不自由もなければ不可能ということもあり得ない筈です。乏しきを領合つた戦場のさ、やかなよろこびも今は懐しいかけがえのない想い出の中によみ返つてくるではありませんか。この世に処し必要なことは、われ今何をなすべきか、いかにしてそれを達成すべきかというわれ自らの意欲と実行力こそ大切だと思ひます。

今の世の中は、政治にしろ、経済にしろ、軍事にしろ何事についても意見は真二つに割れて対立しています。一億一心といった訳には参りません。連帯と協調を呼号してこれをなだめすかしたとてオイソレと妥協できる時代ではありません。不信の罷り通る世の中です。それだけにわれ／＼の個人／＼がシッカリした新日本国民の一員としての正しい自覚と自信を持ち他を引きつづけて行くことが必要でありましよう。

私はわれ／＼東部ニューギニアの戦友は、貴重な戦場体験を通じ熾烈なる祖国愛、不動の友愛と信頼感、旺盛なる責任感等を以て、益々経緯固く結び、志操愈々強固に、実行力愈々旺盛たるを失わず、混濁迷走する社会の一隅を照らし、そのよき木鐸として誇り高い存在であることを確信致します。

今年もまた皆様が東部ニューギニアの戦士らしく英霊の心を心とし、夫々の戦場に於てこの上ともご自愛、ご健斗あらんことを祈つてやみません。

東部ニューギニア戦友会

陸海空合同慰霊祭執行御案内

当戦友会においては、東部ニューギニア地域に参戦した陸海空全部隊の英霊を慰めるため恒例としている、四年目の合同慰霊祭を、左記により執行致します。

万障お繰合せの上御遺族共々、生存戦友全員御参列下さるよう御案内予告申し上げます。
日時 昭和五十四年四月十五日(日)十一時
場所 靖国神社 参集殿

各部隊会戦友会懇親会

当日は昇殿参拝と千鳥ヶ淵戦没者墓苑参拝をもつて慰霊祭は終了となりますが、各部隊戦友会では御遺族共々懇親会に移行されるものと予想されます。当日は全国よりの参列者も多人数に及ぶものと思われまふので、懇親会場、宿舍その他は各部隊会に於て御配慮、お手配の程お願い申し上げます。

細部については在京各部隊会世話人と連絡されますようお願いいたします。

事務局

会務概況報告

戦友会代表世話人
元十八軍参謀

田中兼五郎

会報第九号の発刊にあたり、第八号(昭和五十一年十二月一日刊行)で報告した事項に関連し、その後の状況の概要を報告したいと思います。

一、堀江正夫氏の当選

第八号刊行以後今日に至るまでの経過のなかで、最大の報告事項はなんと申しても堀江正夫氏(元第五十一師団及び第十八軍参謀)の参議院議員選挙における嚇々たる成績をもってする当選であつたことと思います。

これは、各部隊戦友会の皆さまから寄せられた熱烈な御後援と御協力の賜でありまして、厚くお礼を申上げる次第であります。当選後の堀江議員は第八号に寄稿されております所信のとおり進んでおられるようであります。すなわち、同氏の所信によれば、「私は政治家となつても戦友とニューギニアを忘れることはできません。私は今後東部ニューギニア戦友会及び日本バブア・ニューギニア友好協会の一員たることを光榮とし、この道を進み続けるつもりであります。そしてまた政治活動においては、現在の防衛問題のほかに英霊の問題(遺骨収集、靖国神社、護国神社等)、御遺族の問題及び戦傷病者の問題も具体的に取上げ、亡き戦友あるいは傷つた戦友のために働かせていただきたいと考えております。」とあります。心から御自愛と御健斗を祈ります。

なお、黒住忠行氏(元海軍第七根拠地隊)には全く残念な結果になりました。どうか

御自愛のうえ捲土重来を祈ります。

二、実行できた事業

昭和五十一年に実行できた事業は東部ニューギニア方面慰霊巡拝とエリマス・ソレギ氏の日本招待でありました。

東部ニューギニア方面慰霊巡拝は、昭和五十一年三月二十四日から三十一日までの間、厚生省主催の下に遺族約三十名で行なわれました。当戦友会としては、厚生省の依頼により現地案内として三名(第二十師団平井和雄氏、第五十一師団黒崎薫氏、南海支隊今西貞茂氏)に参加していただきました。報告によりますれば、極めて有意義に行なわれ、参加された御遺族も御満足だったようであります。ソレギ氏の招待は、茨城県その他の四四兵站有志が中心となつて行なわれました。ソレギ氏は息子帯同で四月十四日來日、二十八日の離日に至る間毎日の歓待を受け非常に満足してニューギニアに帰りました。東部ニューギニア戦友会としては協議の形をとつたわけでありますが、四四兵站の皆さんはほんとうに良いことをしていただきました。

三、実行できなかった事業

西部ニューギニア方面遺骨収集は、インドネシア政府の態度が好転しないため、また東部ニューギニア方面慰霊碑の建立は、現地の土地問題が解決しないため、いずれも実現できませんでした。昭和五十三年度も見通しが立っておりません。われわれとしては、厚生省とよく連絡して五十四年度以降なるべく早く実現するよう努力を続けて

参りたい所存であります。

四、今後の主要国内行事について

昭和五十四年は、東部ニューギニア戦友会の合同慰霊祭を行なう四年目の年に当つており、また安達十八軍司令官(昭和二十二年九月十日ラバウルにおいて自決)の三十三回忌の年にも当たります。この大きい行事の調整を密にするため、一月二十二日各部隊世話人会を開催して検討が行なわれました。結論の要点は次のとおりであります。

- (一) 合同慰霊祭は前例に従い、春季靖国神社で行なう。(四月十五日)
- (二) 安達軍司令官の三十三回忌は秋季、十八軍司令官が中心となつて行なう。要領は今後検討するが、各部隊からは代表の各位に参加していただく。
- (三) 昭和五十三年度はこの主要二行事の準備の年とする。

五、会計の現況について

詳細は後藤さんの報告に譲りますが、この会報第九号発行後の会の残金は約一八〇万円程度になる予定であります。この残金をもつて、やり残してある事業と五十四年の合同慰霊祭等の事業をやり抜くには今後余程の考慮が必要ではないかと考えております。

以上で報告を終わりますが、私の目下の最大関心事は五十四年度の二つの国内主要行事の準備と、やり残しの西部ニューギニア方面遺骨収集及び東部ニューギニア方面慰霊碑の建立の問題であります。これらの点に関し会員の皆さまの相変りませぬ御指導と御協力をお願いします。

(終)



近況ご報告

社団法人日本バブアニューギニア友好協会副理事長
元二〇師団副官 平井和雄

戦友並にご遺族の皆様、益々ご健勝にてお越しのこととお喜び申し上げますと共に戦友会会報を通じ平素の疎遠をお詫び申し上げます。

昨年三月厚生省が実施しました全国各都道府県遺族代表の東部ニューギニア戦跡慰霊巡拝団の派遣の際、厚生省は戦友会に対し慰霊団の現地案内のため戦友会から戦友の参加方を要請があり、戦友会から図らずも私はこの現地案内の大役のご推せんを受け、昭和四十四年十月戦友会が実施した遺骨収集団派遣の際団員として参加以来七年半振り慰霊団のお供をして現地慰霊の旅をして参りました。私の担当した第一班は「ウエワク」「アイタベ」、山南地区)ご遺族十七名で「ウエワク」ホテルに滞在(四泊)、連日早朝小型バス二台に分乗して宿舎を出発「ウエワク」周辺、「ウエワク」「サスイヤ」「ヤンゴール」「マブリック」道を、山南の各部落で内地から持参した品々を供えて慰霊、途中の山坂では炎暑の中を度々バスから降りて後押をしていたきながら目的地「マブリック」にたどり着き慰霊をして参りました。

戦前のニューギニアは私達には極めてなじみの薄い国で、つい数年前まで新聞、テレビ、雑誌等で地球上に残された唯一の未開の秘境と興味本意に報道されたこともございました。このニューギニアも昨年一月日本(鹿児島空港)とバブアニューギニア(ポートモレスビー空港)間にバブアニューギニア国営のニューギニア航空が航空路を開設、鹿児島空港を飛び立ち南太平洋上を一路南下して赤道を越え、セビック河、ラム河々口附近上空を経

て、ビスマルク山系を越えてポートモレスビー空港へ、その間僅かに約七時間、新幹線で東京―博多までの距離に短縮されました。

パプアニューギニアは皆様既にご承知の如く昭和五十年九月十六日第二次世界大戦後の国連統治下から独立して国連に加盟、独立以前から政権を担当した大の親日家で偉大な指導者マイケル・ソマレ首相が昨年七月実施された独立後第一回の国会議員選挙に於ても勝利を収め、改選後の国会に於いて引き続き首班に指名されました。

新生パプアニューギニアは卓抜な指導者マイケル・ソマレ首相の指導力によって平和と自由を国是に掲げ、民生の安定、教育の普及と向上、国土並に各種産業の開発に目覚しい発展を遂げつつありますことはパプアニューギニアに特別の関心を持つ私達にとりまことに同慶に堪えません。

日頃皆様のご支援とご指導を賜わっております社団法人日本パプアニューギニア友好協会は昨年八、十、十一月と三次にわたり戦友並にご遺族多数のご参加を得て慰霊巡拝団を現地に派遣いたしました。本年度第一次慰霊団の派遣を八月に予定し準備を進めております。お一人様でも多く慰霊巡拝団にご参加を衷心よりお願い申し上げます。

四年毎に東部ニューギニア戦友会主催で靖国神社で執り行つて参りました陸海軍戦没者合同慰霊祭を先日各部隊世話人が市ヶ谷の偕行社に集り来月四月十五日開催することに決定をいたしました。まだ一年先のことでございますが、四年振りに全国各地からご参列をいただきお元気でなつかしい皆様と打揃つて昇殿参拝、亡き戦友の英霊のご冥福を祈願する日を楽しみにいたしております。

戦後も既に三十余年お互に年輪を重ねて参りました。ご健康に特にご留意をお願い致します。

ますと共にご尊家のご多幸を心から祈念申し上げます。



戦友会のこと

元第五十一師団参謀 岡本隆久

去る三月二十一日に宇都宮の護国神社において第十回の栃木県東部ニューギニア会慰霊祭が挙行されたのが幸い参加する事ができました。この会は毎年春分の日を期してこの護国神社に集ることになっております。今年は相憎く一寸雲り空であつたけれど定刻十一時半には会員百数十名が参集し梅が咲き匂う慰霊碑前で三十三年祭がおそかに執り行われました。東部ニューギニア会の杉山茂会長田中兼五郎副会長も東京から出席され錦上華

を添えられたのでした。ここの慰霊碑は此関東で編成された第五十一師団(基)及び第四十一師団(河)や「ラエ」作戦部隊にとつて忘れられないあの「サラワケット山系の南側で採取した巨岩でありまして、昭和四十四年の東部ニューギニア遺骨収集团に参加した会員の方々が苦心して持ち帰り奉安したものであります。この前に立つと今もなお当時の山容、山越えの苦心が想い出され胸にせまるものがあります。

東部ニューギニア会の発足が昭和四十四年の遺骨収集团派遣を契機とするのと同様に栃木県東部ニューギニア会も時を同じくして発足したのですが、特に当時は宇都宮の本部を中心として県内の市町村単位まで強力な組織が作られ、遺骨収集团派遣の為に広報募金をはじめとして目ざましい活躍をし大きな業績をなしたものであります。慰霊祭は以来数えて十回目、会長は終戦まで私達と生死を共にした基兵団の沢田軍医部長がなられ、同氏を中心として各兵団、部隊の世話人が呼吸の合ったガッチリとした態勢を維持しております。

会社や公務員勤務の人も定年で追々と郷土に落着きはじめていますので、尚一層陣容に厚みを加えて行くようで御同慶の至りです。沢田会長は八十五才になられますが、毎回出席され気迫のこもつたお話ぶりやおだやかな温顔は会員の心を明るく一つにまとめておられるようです。

又第五十一師団(基部隊)の「基友会」としての発足は昭和二十九年であり以後隔年毎に大会を開いています。昭和四十一年四月には師団司令部所在地であつた宇都宮で行われ、中野師団長祭主となり護国神社で盛大厳肅に慰霊祭を行い、式後に神社の北側の庭に大野宴を設けられた事があります。その他の時は

靖国神社で行われそのあとこん談会を開いて居ります。昭和三十一年第一回の会員名簿の発行、昭和四十一年には第二回の会員名簿及び師団の歴史とも称すべき「坂東太郎」(軍の吉原中將編さん)が発刊されています。この会が現在まで発展維持されたのは戦争間この師団に終始勤務された鈴木元明参謀とこれを助ける吉川師団副官を中心にして各部隊の代表世話人の献身の努力のお蔭であります。昭和四十四年、四十八年再度の遺骨収集团派遣の為の諸事業では兵団の中心でありました。

軍隊の会としては古い明治以来の伝統の連隊会や同期の会もあり、靖国神社に集る戦友会とともに夫々に意義ある会だと思います。

東部ニューギニア会や基友会、各兵団、部隊などの戦友会が戦後の混乱の中で同志、旧知相集り、そのうちに名称がつけられて会として発足したものや、最初から立派な組織の会もあつたり会によって各種色々だと思ひますが、遺骨収集、戦跡巡礼が会のその年の主目標だつた事が一再ならずありました。これらの行事の計画や実行が大変だつた事は既発行の東部ニューギニア会報に載せられていますが、その業績がすでに戦後における歴史の一面を作っているわけであります。永久に記録されるべき事でしょう。夫々の戦友会の記録は貴重な記録だと思います。

定年を過ぎる頃になると戦友会が益々懐しくなつて来ます。戦友会を大切にしたいと思つています。定年になるまで二十数年勤務地を転々としていた者として世話人の方々に感謝して居るのみです。



御礼に代えて

参議院議員 堀江正夫
元十八軍参謀

まずもって、ニューギニア戦友会全会員の皆様のご清福とご活躍を心からおよろこび申し上げます。

もうやがて一年近くも前になりますが、昨年七月の選挙の際は、全会員の皆様とご家族の皆様から、絶大なご高情とご支援を賜わりありがとうございました。八十一万票余という、大変な票を頂いたのも、一にかかつて、ニューギニア戦場において苦難を共にしてきた同志の皆様のご愛に基く、巾広い国民各層に対する働きかけの成果と感謝を申しあげ肝に銘じているところであります。

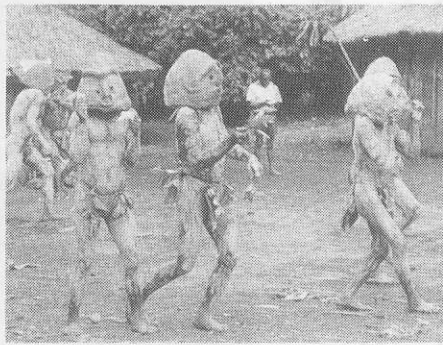
選挙前から選挙後の今日まで、全国各地を歩いておりますと、あちこちで、「私も東部ニューギニアの生き残りである」、「私は〇〇部隊だ」、「私の主人は〇〇で戦死した」等色々な方から声をかけて頂き、激励を賜って参りました。私にとって、これらの皆様の心の籠った呼びかけやご激励がどんなに励みになりましたことか、今更のように有難さを心に思い起しております。

議員としての私に課せられ、私が挺身しなければならぬ最大の責務は、防衛問題と、戦争犠牲者あるいは戦場で献身した人々に対する国家的補償救助であります。

この責務を達成するために、国会においては内閣委員として、自由民主党内においては、国防関係、外交関係のほか、恩給関係、遺骨収集関係等の各部会の委員として、また別に、郷友議員懇談会、軍政議員協議会、傷病軍人援護議員団、自主憲法期成議員同盟、国防議員連盟その他外交関係各議員連盟、更に最近結成された英霊にこたえる会議員連盟、国防

衛議員連盟等のメンバーとして、一生懸命勉強もし微力も捧げていることをご報告致します。

最後に重ねて、会員の皆様方のご高情を深謝申し上げますとともに、一層のご健勝とご多幸をお祈りし、併せて、今後共よろしくご指導ご激励ご支援を賜りますようお願いからお願い申し上げます。



私の八月十五日

海軍第八軍艦隊 渡辺哲夫

昭和二十年八月、私達海軍第二七特別根拠地隊約六五〇名は、「東部ニューギニア」の一つの点にすぎない小さなカイル島で豪州軍に包囲されていた。

大陸にても、陸軍第一八軍(二〇師、四一師、五一師ほか)が山奥深く追いつめられ、糧食、弾薬遂に尽き、七月二十五日、軍司令官安達二十三中将は「祖国の難局に殉じ、悠久の大義に生きるべし」と悲壮なる玉碎命令を発した。

愈々最後の場面を迎えたのである。補給はこれまで全く無く、「大東亜戦争の

捨石となるべし」との大本營の方針により、いわゆる現地自活「サゴ椰子澱分採取、甘藷、南瓜、豆類の農耕栽培」を続けていた。私自身転進し、この島に收容されて後、マリアのためか、無念にも右眼の視力を全く失い、その後もビタミン欠乏により、脚は象の様にむくんでいたが、動ける限り病弱兵を診療していた。

全員栄養失調とマラリア患者であり、腸炎、下腿潰瘍等も多く、発狂したり、ブクブクふくれあがつたりして、人間が虫けらよりも脆く死んでいった。特に黒水熱(悪性マラリア。ヘモグロビンが破壊)は真黒な小便を出して、最も恐れられていた。薬もビタミン剤もなく、軍医たる私はせめて若い椰子の実の果汁をブドウ糖代りに注射するか、玉蜀黍の毛、またバナナの根を刻んで煎じて飲ましたりするくらいのことしか出来ず、毎日のように最後の脈をとっていた。

元一八軍参謀長吉原中将は、その回想録の最後に次のように記述する。

「……誠にニューギニアの悪戦苦闘は言語

に絶するもので、食うに食なく、着るに衣なく、医するに薬なく、しかも、なお祖国の安泰を祈念しつつ、自ら犠牲の関頭に立つて些かひるむ所なく、護国の忠鬼と化したのである。……」

日常の会話と言えは食物の話ばかり。どうせもう運命は決まっているのだから、うまいものを腹いっぱい食べてから死にたいものだ——と、誰もが思い、銀座のどの天ぷらはうまかったとか、新宿の中村屋の羊羹は舌にとろけるようだったとか、同じ話を繰返えしては、生唾をのみこんでいた。

敵は毎日のように、魚雷艇で島を巡り、マイクで降伏をすすめ、また空からビラをまいた。「ニホンノミナサン、ムダナタカイラヤメマシヨウ。ワタクシタチレンゴグンハオキナワモセンリヨウシマシタ。ワタクシタチハタペモノヲタクサンヨウイシテオリマス。ビヨウキニタイシテクスリモアリマス。ミサキニシロイハタラモツキテクダサイ、オムカエニユキマス」

しかし、ルバング島の小野田少尉と同じく、私たちは誰も降伏の意志はなく、「健兵は三敵と戦い病兵は一敵と戦い重患はその場で戦い、動き得ざるものは刺し違え、各員絶対虜囚となるなかれ」の命令を守る決意を固めていた。

最後はどうやって死のうかと、軍医科士官同士で話し合ったことがある。手榴弾を抱くと肉がバラバラに散るし、自分だけでは勿体ない。これは敵陣に投げて、後に頭に拳銃弾を打ちこむのが確実であろうということになり、そのために拳銃を磨き、ときには試射をした。私自身も、ねばるだけねばって山頂の司令部地区まで退つて、最後は拳銃をくわえて引き金をひく積りであった。

そうと心に決めていても、断難い望郷の

NEW GUINEA



第18軍終戦時態勢



念に駆られ、飛行機も飛ばず、大自然の静寂にかえった夕暮どき、よく海岸に出てよせてはかえす静かな波を眺めていた。この海こそ、故国に連なる唯一のみちであることを想って八月十五日以後

思えば、余りにも惨めな、一方的な戦であった。万に一つの勝目はなかった。蒼白い栄養失調の日本軍に対する補給充分の連合軍。小銃と大砲の撃ち合い。戦車で蹂躪され、火焰放射器で焼かれ、敵機は日本兵一人でも見つけば執拗に銃撃した。日の丸のついた飛行機が飛ぶのを、一回もみたことがなかった。「俺たちは助かったぞ」兵士の顔に忘れられていた笑いが浮んだ。負けて元気が出た、帝国海軍の終末であった。

武装解除をうけた後、隣りのムシュ島に收容されることになった。私は部隊を引きつれて最後の行軍をしていた。椰子の葉陰で、日本軍に協力してくれた土人らが手を振っていた。

た。真黒い顔に白い歯が輝いてみえた。病弱兵の集まりであった北岸部隊は、よたよたして、丸腰であったがため、余計みすばらしく、かつての精強海軍陸戦隊の面影は全くなかった。大きな豪軍上陸用舟艇にやっと乗り移ってきた日本兵を、艦でどっかりと座わった豪洲兵が勝者の態度で見おろしていた。ムシュ島には早くも一八軍軍医団が集まっていた。かつて、この島の海軍守備隊に配属されていたがために、私は陸軍軍医団に對して、島の衛生状態、またマラリアの特性につき講演した。ここでは部隊と離れて海岸病舎配属となり、海兵のみならず、逐次大陸より送られてくる陸兵の診療にも当たった。豪軍からは、薬剤、衛生材料等が豊富に支給され、私達軍医も、やっと本来の医療が出来る状況になった。が、しかし入院患者は、既に生に對して限界にきていた。

私は以前、水雷艇乗組員時代、ガダルカナルよりの転進兵を見たことがあるが、ここではそれ以下の人間の姿であった。まともな服を着用している者は少なく、皮が骨にくっついていて、これが生きている人間か、と眼を疑いたくなる光景が、毎日のように見られた。ガ島の時は、細々ながら潜水艦補給が続けられたが、東部ニューギニアに対しては、二年間殆ど補給が無かった。その中で生き残ってきた人間の姿であった。

私は、むくんで重くなった脚をひきずって、毎日一〇〇人からの病兵を回診していた。「海軍の軍医だの、お願いです。日本に帰らせてください。妻や子に会いたいです。」おそろく応召兵であろう、全身のむくみで、閉じまわっている眼から涙が一しずく。そして、その手は私の足を捕えて離さない。「助けてください!! どうか助けてください!!」。あちこちより必死の手が私の足にまと

いつく。

戦い終って、死ぬことの無念さ、如何ばかり。どうにかして助けてやりたい。でも栄養失調で骨と皮ばかりの者が、水ぶくれになった時は駄目であった。病舎で毎日二〇名も死んでゆき、珊瑚礁の島で墓穴を掘るのもひと仕事であった。

——終戦後ムシュ島集結間と、事後、内地帰還までの間に合計一八九三名が栄養失調、マラリア等にて死亡——と記録されている。

捕虜になって、手荒い取扱いをうけることを覚悟していた私達は、意外と徹底的に人命を尊重し、底抜けに明るい豪洲兵を知った。戦闘中の異常な雰囲気にあつて、憎しみ、殺し合った人間とは、とても思えなかった。

係りの若い豪洲兵が、私の海軍軍医少佐の襟章を見て、「ハロー、メジャー!!」と話しかけてきた。初めて聞く英語は、豪洲なまりがあつたが、馴れると、判りよかつた。「日本軍では、陸軍より海軍の方がスマートだね」と言い、私の長髪がボサボサで油気ないのを見たのか、ボマードを持ってきた。

昭和二十一年一月、内地より特設機雷敷設艦・高栄丸が入港した。かつて内南洋で船護衛していた頃、訪ねたことのある艦なので、よく生き残ったものと、なつかしさがこみあげてきた。お互い血の気のない黄色い顔を見馴れていた吾々には、色の白い日本人船員が、別の人種の様に思えた。

乗船前、豪軍により身体検査が行われ、私は腕時計をとられ、代わりに、黙って缶入り煙草を手渡された。二年間の困苦の末内地にも帰ることが出来たのが、この煙草と、一缶の Ration (豪軍の携帯食糧) であった。

附記
(この文は五十二年八月十三日、日本医事新報に発表したものです。)

悲運の京都兵団証言録
防人の詩(南太平洋編)

灼熱のガダルカナル、峻険のサラワクットに展開した死闘の記録。ここには勇壮な軍歌などはなかった。戦史の底に沈んだ将兵の新証言を掘り起こして綴る鎮魂のドキュメント。

体裁ⅡB六判・上製・四七八頁
価格Ⅱ、四〇〇円・送料二〇〇円



購読ご希望の方は書店へ。または京都新聞社出版部宛、郵便振替か現金書留にて送金下さい。(なお、京滋在住の方は京都新聞販売所でも可)

京都新聞社

京都市中京区烏丸通夷川上ル
電話(〇七五)二二二二・二二二一
振替・京都八九

韓国の旧衛戍地訪問記

旧二師師団歩兵第七十八連隊

斎藤 顕

昭和52年5月14日より17日迄韓国親善視察団の団長として、歩兵第78連隊の生存者、遺族及び関係者17名で韓国の旧衛戍地竜山のあすウルを訪問した。

竜山は戦前、朝鮮軍司令部、第20師団司令部を中心に、歩78、歩79、捜索20、野砲26、工兵20、輜重20の各連隊及び陸軍病院その他の軍施設等、朝鮮に於ける陸軍の集結地であった。

私個人にとつての竜山は昭和16年の士官候補生時代と昭和18年の東部ニューギニア出征する直前の朝鮮第22部隊に勤務した見習士官時代の前後計7ヶ月間の短期間の勤務地ではあったが、青春多感の時期を過ぎた懐しい場所でもあった。

前年の昭和51年12月に死去された歩78連隊長松本松次郎閣下の葬儀が、栃木県壬生町で行われた際、会葬の戦友達から韓国訪問の話が持ち上り、戦友田平政敏氏の御尽力により実現したものであった。

5月14日キャセイ航空によつて金浦空港に到着するや、ニューギニア以来の戦友に迎へられて三十数年振りの感激の握手があり、早速空港貴賓室で韓国戦友代表の劉琦華氏による温い心のこもった懐旧の挨拶があり、当視察団を代表して私は訪韓の挨拶を述べ、夫々全員の紹介が行われた。

第一日は仁川オリンポスホテルに宿泊が予定されていたので、往時の訓練行軍で懐しい京仁街道を特別仕立のゆつたりした観光バスで仁川に向つた。途中の街並は昔のまゝの処も多かったが、住宅等は立派になっており、

意外に感じたのは電灯が暗く見えたことである。

夫れは車中で韓国戦友とガイド嬢から韓国の現状、特に北朝鮮と対峙して緊張している国民生活の説明があり、暗く感じた電灯は火力発電によるものが大部分であり、その石油が輸入のため外貨節約によるとのことであった。宿舎についてから韓国戦友と翌日以降の行動についての具体的打合せ、特に亡き戦友の慰霊祭について話し合いを行い、浦賀の復員船で別れて以来の会食をホテルの別館にある、オンドルの大部屋で韓国酒と日本から持参した日本酒で酒宴となり、時刻の経過するのを忘れて歓談した。

第二日は朝から韓国戦友が同乗されてのソウル市内観光であり、景福宮、国立博物館等の見学があつて、午後韓国に於いて亡くなられた戦友の慰霊祭を行う代りに、韓国の戦友達が準備してくれた計画に従つて国立墓地を正式参拝した。戦友と共に記張し、生花を供え、ラッパ吹奏の内に厳かに段を登つて歩を進め、拝礼、黙祷を行い、祖国のために亡くなられた英霊に対し敬弔のまことを捧げた。

その後バスで墓地内を一周したが、その広大な適地であること、又一個人一個の個人の石碑の整然さに驚くと共に国家が英霊に対して手厚く葬つてゐる姿勢を見て吾が日本との相違を痛感した。次いで朴大統領夫人であつた故陸英夫人の墓に参拝したが、国民の崇敬人気の的であつたのであろう多数の参拝者が後を絶たず、多くの男女が列を作つてお参りしてゐた。

帰途懐しの竜山歩兵78連隊跡をバスの中から見学した。現在米軍第八軍が駐屯しているため外側から外観を見るに過ぎなかったが、赤煉瓦の塙、将校集会所の建物等は昔のまゝであり、炊事場の建物は変つてゐるが、その



樹間に暮る極楽鳥

の交通の要衝となつており、商店街は立派に近代的になつていて、時代の移り変つた事をしらされた。

夕刻7時から韓国戦友招待によるカクテルパーティー及び夕食会が基地内にある陸軍クラブで行われた。現国防次官であり陸軍中將である李敏雨氏を始め將軍である三名の戦友と、地方の有力者である四名の戦友の計七名と、我々団員十七名全員が一堂に会したわけである。今回欠席された戦友山岸福次郎氏寄贈の電気製品、故松本連隊長の奥様手作りの人形等日本から持参した土産品の贈呈と全員の紹介も行われた。今は異国の友人であつても昔は同じ連隊の戦友であり、共にニューギニアのあの苛酷な戦場で苦勞した仲間であり、飲む程に酔う程に懐旧談は盛んとなり、時間の過ぎるのを忘れて懇談した。日本内地に於ては戦後各地で連隊会が行われ、特に昭和52年2月11日には九州宮崎で、歩兵78連隊、朝鮮22部隊の合同連隊会が始めて開催せられる等、会合は度々あつたのだが、韓国の戦友と一緒に会したのは戦後始めてであり、感慨一入であつた。東部ニューギニア戦友会報第8号にある杉山茂戦友会長の序文にあつた張炳默君も来会された。

第三日は早朝より特殊観光である板門店見学を行い、同じ民族でありながら北と南に分断せられ、朝鮮戦争の時には民族同志が血を流し合い、現在はその交信も出来ない、冷たい両国の軍事境界線の緊張振りと、韓国の防衛施設等を眼のあたりに見て、昨年末頃に問題となつてゐる米陸軍撤退の影響の大きさが理解できる様な気がした。又韓国戦友とバスガイド嬢の国内事情の説明や、午後ソウル市内で私自身が体験した防空訓練の実際が、肌に実感として感じた思ひであつた。軍事境界線より北朝鮮側を望むと、南北の兵士で紛争

になり、それで有名になった太いボブラの木が橋の手前に見え、その傍まで行つてよく見ると、幹の切られた処から青い芽が生え出ていた。米軍基地将校クラブで昼食をとり、帰途に就き、途中、釜山からソウルを経て、昔ならば満州新京迄も続いていた鉄道のレールが終っている鉄道終点を寂しく見ながらソウルに戻った。

午後の僅かな自由時間には、三十数年前休日に出した時の模様を想起しながら戦友と南大門通りや南山の近くを散歩した。

夕刻、街の料亭で団員全員が韓国戦友を招待する返礼の夕食会を行った。昨夜、話の出来なかつた分を残さずする心算であつたが、話の尽きる事はなかつた。戦友の田平政敏氏、森博氏、佐藤政吉氏等と共に、思い出の竜山の紅燈の地に陣地を移して、韓国戦友との二次会を外出禁止時間のぎりぎり迄、愉快な時間を過してホテルに帰った。

第四日は帰国の日であり、特に配慮せられてバスは竜山の町並をゆっくり走り、思い出の地を更に脳裡に深く印象づけて、兵營街や昔のまゝの竜山郵便局の建物等の前を通過して、国民広場に至り、朝鮮戦争当時の軍用機、野戦重砲、戦車等の展示物を見学し、金浦空港に至り、韓国戦友の温い握手に見送られて、帰国の途についた。

三十数年振りに韓国戦友との旧交を温め、青春時代の思い出の衛戍地竜山を訪ねたことは意義深い旅行であつたと同時に、ひいては両国親善に多少なりとも貢献したと信じている。終りに此の旅行に際し、元第18軍参謀堀江正夫氏（現参議院議員）が特に韓国在郷軍人会会長李孟基將軍によろしくとの御連絡を頂いたことに對し、紙上御礼を申し上げて附記する。

昭和53年3月10日記

(以上)

東部新基尼亞戰線 八首

元高射砲第六大隊
石田久喜

一、渡洋出陣

輸送船群泛海連
中原爭霸又南旋
夜過赤道仰橋上
十字煌星妍更妍

二、敵前上陸

魁然斗志老軍曹
一蹴舷頭立渚涛
上陸敵前無敵影
朱顏切齒握腰刀

三、布陣

前來瘴癘熱如湯
鬱勃密林新戰場
意氣衝天椰樹下
四門高砲對空強

四、敢斗

美寇群翔襲碧空
轟然砲吼起芳叢
乾坤童叟爭瞬時
十里荒涼一陣風

五、行軍

乾咽踏破密林泥
刀杖疲衰鐵帽低
求草飢腸長路險
鳴鳥頭上夕陽溪

六、露營

露營長夜餓腸侵
割木新床眠淺深
三歲無魚人解否
一竿釣鉤夢中尋

椰子林
七、土人
中葉屋村

土民全裸面黥在
宛然太古倭人貌
今日皇軍有一禪
八、奉安達軍司令官閣下自書

將軍自決貫丹誠
枯骨不還芳草生
非利回天楠氏意
高勲長曜護皇城



軍属無残

元海軍第八建設部々員 持田三郎

あの時から四十年も経過していると謂うのに私達は年毎に相会して想出を語り会っている。その間には英霊を探し求めて献身したり慰霊祭のために多忙な社会生活の時間を割くことに意義を感じている。

その親睦の思いは年毎に加わる。それは輝ける帝國陸海軍の戦士であつたればこそであろうか。

私はこれらの会合に参加する度に言い様のない心の痛みに暗然とする。

それは戦没した軍属諸氏の霊は今何処に輝かしい功績が称へられているであらうかと言ふことである。肉親のささやかな供養の手の中に、ひっそりと弔われているのであろうか。

東部ニューギニアに限つて言へば第八海軍建設部に従軍し戦没した五百余名の人々である。八建は海軍省令に依つて全海軍唯一の建設部である。その新編成の目的は戦地に生産を行き軍の後方基地として自給体制を築くこと

であつた。その発想はドイツのトット工作隊の実験に習つたものである。

この使命遂行のために多くの専門職が軍属として準徴用を受けた。三井農林、東北振興水産、林業開発挺身隊、南洋食品、矢島組などである。更に台湾銀行もこれに附随した。無念の敗戦により民間の組織は混乱した。派遣元の有力でないもの、終戦により解散した様な商社の軍属はこの時を境として消息を断つた。これらの人々の家族はどうなつて行つたことであらう。

十数年前私は戦没した労務者の戦死証明書を書いたことがある。居住地の市町村もその取扱いに苦勞し本人が現地から送つた一枚の軍時郵便ハガキに頼る様な事であつた。その人々の中には戦死に依つて軍属の身分を取得すると言ふ様な省令もあつた。

戦後二回の隣国との国交条約締結に際してもこの軍属の問題はその処理に窮し私は根拠になる資料のないのに困難したことであつた。昭和十年南在武官府に在勤中、南洋委任統治の島嶼に受刑者の労務者が隠密工事に従事していたことを記憶しているが、昭和十九年二月頃船舶団護衛船に勤務中廢墟と化したトラツク基地の夏島にも陸軍部隊に使役されていた青隊と呼ばれる囚人部隊の少数が生き残つて勞役に服しているのを見た。その行動は軍人軍属に何ら変るところはなかつた。

あの人達の魂は今何処にその安らぎを求め、さまよっていることであらうか。

国家総動員の時代軍も民もなかつたとは言へ私達と膝を並べて靖国神社の前にぬかづくべき遺家族がある筈であらうに戦果の陰にこんな犠牲が排はれているのに今となつては、もうどうしようもないこの歎きは私の死に到る時まで、重い十字架となつて行くことであらうと思う。

思うまゝに

航空十二気象隊 小畑市郎

年々歳々花相似たり年々歳々人同じからず、朝に会い夕に別れるは人の常、小生の身辺にも昨年来様々な変化が起りました。

歳月の流れは早いもので、四十八年皆さんと亡き戦友の御霊を御迎えに、パプアニューギニアに行きましてから早や四年の星霜が過ぎ去りました。あの遺骨収集作業にあたりましては、ほんとうに親切に骨身を惜まず私達に協力して下さった現地の人達は今尚達者でいるだろうか、又どうしているだろうか、あれを想い之を想い、今静かに当時を回顧している所であります。

今後共命ある限り、亡き戦友の鎮魂の祭事は続けて行く心算であります。

最近の日本の内外の諸情勢は誠に憂慮に堪えないものがあります。外にありては、対米対ソ対中国等との等距離外交の難しさをしみじみ感じます。内にありては、経済外圧・景気浮揚対策等、どれ一つ取りましても容易ならざるものがあります。しかし如何なる事態になりにましても二度と再びあの三十四年前の経験（武力手段）は二度と繰り返してはなるまじ、と固く心に誓うものであります。智慧と努力で、必ず我等日本人はこの難局を乗り切って行くことでありましょう。

機会を得まして本年一月下旬「グアム」「サイパン」島に慰霊巡行に行つて参りました。「グアム」島には、現地の好意により立派な慰霊塔が建立されてありますが、若いカップルの観光の皆さんの巡拝は皆無の状態でした。（当日私一人でした）言い知れぬ淋しさを感ずりました。

昨今、防衛論議が活発になってきました。喜ばしいことです。自国の防衛は自らで方向

を確立したいものです。

光陰惜むべし時は人を待たずです。一日一日を大事に有意義に生き、一日でも長く亡き戦友の供養を続けて行きたいものです。終

ニューギニア慰霊紀行

元防空隊司令 堀江正水



日本戦没者碑
マダンと参拝者

戦中吾が軍の最も大きな根拠地となり第4航空軍の飛行場や第18軍の兵站基地の置かれたウエワクが近づいた。眼前に松の岬の大きな半島が迫り、その向うに阿部岬更にその先にウエワク半島が見える。機は大きく旋回したかと思うと元の陸軍東飛行場の跡であるウエワク空港に滑り降りた。飛行場周辺の山々のたゞざまいは昔乍らに、高射砲62大隊奮戦の後に立ち感慨一入である。一旦ウエワク半島にあるホテルに落付く。このホテルは日バ友好協会の戦友の一人が豪洲人と共同経営の由にて日本人の支配人が居り何かと易易く好都合で昼から現地人の青年を一人雇い、先づ一番に私共部隊の陣地のあった洋展台に向う。元の中飛行場の傍を通るとすっかり荒れ、草茂るままであるが、ミッシンが私設飛行場として使つて居る由、海岸道路は舗装され立派になって居る。附近の美しかった広大な椰子林は爆撃で影形なく痛めつけられた為に一面の草原となつて居り、之又ミッシンが牧牛を盛んにやつて利用して居る。坂途にかかると昔の面影が残る台入口の巨木も元のままの姿で迎えて来れたのはうれしい。台上の元

司令部跡には又ミッシンの建築が出来て居り、吾々12防司の幕舎のあった辺りや台上からの眺めは昔のままに懐しい限りである。18年8月から19年初頭にかけてこの台上の陣地に頑張り連日の敵機の猛爆と対空戦斗に明け暮れた日々が眼前によみ返つて来る。爆撃下に散華した戦友を偲び台上の慰霊碑の前で心から黙祷を捧げる。

次で密林の中の戦友の埋葬地探しに入る。うろ覚えの地図を頼りにミッシンの教える山途を下りた処後方のサゴ椰子林に迷い込み再び這い上るのに苦勞する。横孔の防空壕の跡等を踏み分け乍ら台上に戻り今度は元海軍農園方向によく見当をつけ、土人と共に再度山を下る。漸く道路らしい処に出て行くと間もなく小川に出くわした。この上流が吾々部隊宿営の炊事洗濯水浴の水源であつた所と推定された。併し附近は樹木が繁り様相がすっかり変り土民の家が多数建ち昔の面影が無い。暫らく踏破して探すも明確にならぬまま、小川の位置から判断して旧幕舎位置に最も近いと思われる地点を選び、携行した靖国神社の神酒と落雁を供え土人と共に心許りの慰霊祭をする。岡戸部隊長以下ウエワク陣歿の戦友の霊よ長い年月をこの密林に眠る。何卒永久に安らかにニューギニアの榮えと共にあれと、12防空司令部関係の方々の気持も併せて深い祈りを捧げた次第である。

ウエワク周辺地域

翌8日は更にウエワク近辺の古戦場を廻る事にした。先づホテル支配人の案内でウエワク半島を一周する。高射砲61大隊の中隊陣地跡でその奮戦の跡を偲ぶ。又昭和20年の戦末期には遂に豪軍がここに上陸し守備部隊は全滅した場所、今ではきれいな公園の様になつて居り元海軍のコンクリート造りの地下壕のみ残つて居る丈である。更に又洋展台下に

残る高射砲陣地に案内される。元61大隊のものであろう、直下の密林の中に引上げて据えてあり、恐らく豪軍の上陸に備え海岸射撃に備えたものと思われる。錆びたまに形骸を留める三門の砲が海岸の方向を睨んで居るのは感無量である。

昼からはタクシーを雇い独りで山の方へ入り、私共の設置した監視哨のあった部落を訪れる。洋展台の東側から車で登ると豪州政府の建設したマブリック街道がアレキサンダー山系を縦走して立派な道路に仕上つて延びて居る。この道路を車で走ること十数軒で陵線を越すと遙かな樹海が展開し、その向うはセピック流域の大草原と見受けられた。私共が設置したシブリング対空監視哨の跡附近と覚える処で暫らく眺望する。道路を少し横みちに入つた小高い山の上にNo3シブリングという小さな部落があった。村人は皆働みに出掛けて居り、少年数名が夕飯の支度か鍋にバナナの葉をかぶせて何か炊いて居る。昔世話になつた日本の兵隊が御札に立ち寄つたことと事情を話し、僅か許りの土産品を手渡しキャブテンに御札の伝言を頼んで、うれしそうな顔の少年と手を握つて別れた。

再び車を走らせ海岸方向に戻り戦跡の巡礼を続ける。ウエワクの東海岸には高射砲61、62大隊や航空2中隊が布陣し奮戦した跡である。先づ阿部岬の突端に至り日本政府が建立した唯一の慰霊碑に詣で、全戦歿者に心からの慰霊を捧げる。碑は小さな粗末な花崗石造りで淋しい感じがする。松の岬は公園の様に整備され、ニューギニア陸軍のキャンプが出来て居り土人の正規兵が正門に立哨して居るのを見て独立国の息吹を感じさせる。続いて西海岸ブツツ方向を訪れる可く車を駆つて西へ、当時我々が上陸した海岸辺りを眺め乍ら整備された舗装道路を走る。この海岸附近

には戦時中は姿を見せなかった現地人が進出して来て、店舗やマーケットが立ち並び土民が多勢屯したり往来して居り隔世の感がある。更に西進するとオーム岬へ入る。我が第18軍の安達司令官が20年9月豪軍司令官に降伏調印をした処で、ニューギニア政府が終戦記念慰霊公園として整備し立派な慰霊碑が建てられ、我が戦利兵器も飾つてある。今では恩讐の彼方の出来事となつたと云え、戦の勝敗の事実をまざまざと見せつけられる。オーム岬を後に更に西へ元飛行場のあつたブーツへと走つたが、途中ハワイン川の吊橋が落橋して居りタクシーでは渡れない。下流の浅瀬を渡渉するトラック類を川岸に立ち眺めて居ると、

アイタペ上陸の敵攻略作戦の頃重い背負子を背にこの川も渡渉して歩き続けた当時の事が夢の様に想起されて来る。夕暮れ迫る頃元来た道を帰途に就く。

ウエワクの最後の夜はホテルの支配人や同宿の日本の若い商社員等と歓談の一時を過す。ウエワクには土人の数も非常に増加しすっかり街らしくなつて来たが、一歩山間部へ入ると土人の部落は昔年らの生活様式で現代と古代が同居して居る奇妙な社会が出来て来た感じがすると云う。吾々が末期に居たセビック上流奥地へ入るにはミッシェンの飛行機をチャーターする等の要があるそうで、今回の日程では到底無理なのであきらめざるを得ない。

翌9日早朝故郷の様なウエワクを後にし再びマダン経由でモレスビーへ飛ぶ。モレスビー空港にキラ・ワリ君(日バ友好協会の実習生として来日)が出迎えられ又市内の案内をして頂いたのは有難かつた。モレスビーは新生P・N・Gの首都で人口約10万、政府、国会、大学等があり近代的建物も出来て居る。唯与えられた独立であり経済国防等一人立ち

は未だ難しく豪州等の援助を受けて居る様だ。農林漁業等が国策の基本で一般に非常に親日的で日本の指導援助を期待して居るという。戦時中日本兵の播いた良い方の種子が受け継がれ、現地人の心に宿つて居るとすれば、地下の英霊以つて瞑すべきであろう。

15万の大軍が1万余に消耗し尽した悲惨な歴史——こんな惨禍は再び繰り返してはならないと自答し乍ら、新興ニューギニアの発展を心から祈りつつ帰国機でモレスビーを後にした。何処迄も碧く静かな南の海を眼下に。

○ウエワクの30年後の夜にしてババイヤの味喉に沁み来る。

○密林の下草茂る霊前に今戦友来る神酒注が

○ニューギニアは独立したりこの国の栄えと共に安らかにあれ。

パプアニューギニアの現状

元41師団 梶塚喜久雄

一、政情と外交

昨年四月、独立後始めての国会(一院制)議員総選挙の結果、ソマレ首相の率いるバンク党が圧倒的勝利を占め、人民進歩党との提携により強固な安定政権を招来したのであります。

御高承のようにソマレ首相は、右、左いづれにも偏しない所謂パプアニューギニア民族の伝統を尊重し、緩やかな文明化を標榜して居りますが、その考え方の根柢は、やはり自由民主主義にあり、英連邦の一員としての国造りを目指して居ります。

従つてその外交の基調も普遍主義を掲げたわが国同様の等距離外交にありますが、大使を受け入れているのは、日、豪、英、ニュー

ジラランド、米、インドネシア、比、及びヴァチカン政府だけであり、自分それ以外の国とは外交関係は樹立するにしても、大使、公使等の交換に至るまでには、時間を要するのとでありましょう。この一事を見てもお解りのようにパプアニューギニアがわが国に寄せる信頼と期待は、極めて大であります。

二、わが国との関係

わが国経済界がパプアニューギニアに寄せる関心は、一九七三年十二月この国が自治内政に移向した当時が頂点であり、当時は、まさにわれも、我もとパプアニューギニアに指し向したのでありますが、パプアニューギニア政府の外国投資の受け入れ政策が、従来の開発途上国のそれとは異なつて極めて厳しくかく千金型魅力に乏しい実態が判明するにつれて平静を取り戻し、現状パプアニューギニアに投資するわが国企業は、延べ約五十社、個人で約二十人程度であり、在留法人も約三〇〇人近く、日本からの年間渡航者数も昨年一月ニューギニア航空の鹿兒島乗入れに伴ない漸増を示し一九七五年度一六五九人が昨年度は二四八八人と増加し、今後更に増加することが考えられる。特にニューギニア航空、全日空、内外航空三社によつてニューギニアに対する「パッケージ・ツアー」が設定されたことにより、他の航空路線に比べて高額とはいへ、比較的安易な渡航の便が拓かれたことは、ニューギニアもようやく近くなったとの感を深くするのであります。日本パプアニューギニア友好協会としては、より多くの会員にパプアニューギニアを訪れてほしいとする観点から、この場合僅かながら渡航費の一部を負担援助する方針を定めて居ります。

次にわが国とパプアニューギニアとの貿易関係を見るに、わが国の総貿易額に占める比率としては、まことに微々たるものであるが、

わが国として唯一の輸入超の相手国であり、日本からの輸出品は、輸送機械、加工魚介類、電気機械、タイヤ、繊維等であり、パプアニューギニアからの輸入品は、銅鉱石、木材、ウッドチップ、コーヒー等であります。パプアニューギニアにとつてわが国は、豪州に次ぐ第二位の貿易相手国であり、その比率は、逐次せばまり、やがては逆転の数値傾向を示しているのであります。

三、ソマレ首相がわが国公賓としての来日

わが国政府は、昨年十二月公賓としてソマレ首相をわが国に招へいたのでありますが、独立後僅々二年にして、その首相を公賓として招へいするということは、わが国外交面としてまことに異例でありましょう。もちろん当面の関係者の格別の配慮あつての結果でしようが、パプアニューギニアにとつても「まさか」が実現し、それ自体本来の親日感情に拍車をかける成果を招いたことは否定出来ないものであります。

公賓としての来日時における歓迎行事に引き続き皇居参内両陛下に謁見し、天皇を始めとする皇族方に囲まれての昼食会(これは民間人としてただ一人当友好協会の長井会長夫妻が陪席したのであります)更に福田総理との対談において、両国外交、経済交流の基本問題についての長時間の対談、わが国からの円借款の供与など、今後の両国の友好親善の強化のため大いなる意義と成果をもたらした出来ごとといえましょう。

ソマレ首相は迎賓館での晩餐会の折、私にただ一言「日本の歴史の重みを痛感した」と漏らしてくれたのであります。

因みに同首相が中国訪問から帰国後私に洩らした中国観は「歴史の長さを感じた」という表現でした。諸兄如何に解しますか。(日本パプアニューギニア友好協会専務)

戦友の

三十三年忌を終えて

第四十四野戦通路隊 吉田 哲夫



東部ニューギニアのマダシ、ウエワク地区に戦った盛岡工兵隊編成の吾が第四十四野戦通路隊四二〇名は、終戦の翌年僅か三十三名故国の土を踏みました。あれから三十三年、御遺族は過ぎた年月に関係なく故人に対し変わぬ愛情と追憶をもちつづけています。

皆さんは、立派な墓をたて、心からなる三十三年忌の法要を行って御冥福を祈っておられました。

岩手県陸前高田市の菅野進さんは四四野道第一中隊長菅野少佐の長男です。

菅野少佐は終戦の年の五月十一日にマダシに上陸した敵がウエワク、サウリを占領し、更に山南に進攻してきたので、邀撃の為四四野道二十七名の決死隊長として、シブラシグに戦い、七月一日吉田と二人で頂上で陣地構築中敵機の機銃掃射を受け、吉田のわき一米の処で誠に壮烈な戦死を遂げられました。四十七年八月菅野さん以下三名の岩手の御遺族と共に東部ニューギニア戦跡巡拝慰霊団に加り、ウエワクの山南ボンガリマで合同追悼式を行い、又父戦死のシブラシグの頂上でも慰霊祭を行って永年の念願を果したのです。更に翌四十八年九月十八日から十月十九日までの厚生省企画東部ニューギニア戦友会遺骨収集団のウエワク第六班に吉田と参加出来、毎日ジャングルに出かけては御骨の収集につとめましたことはこの上ないよろこびで

あり、自分の手で埋葬した戦友達の御骨を三十年振りに掘って納める時は本当に感無量でありました。元氣一杯な菅野さんでした。

父の埋葬地点をいくら掘っても御骨はみつかりませんでした。別れの惜しんで去るに当り振り返ってみた中隊長の塔姿は限りなく淋しいものでした。あれから四年半、あの真新しい塔姿も黒ずんで、草や木も茂り、どうなっていることだろうと菅野さんといつも語り合っています。菅野さんも四十才、三児の父。市の靖友会長として永く活躍、現在は県靖友会の役員として専念されています。

遺骨収集の折のハミリはとても素晴らしくて遺族の方々に深い感銘を与えています。昨年十二月十七日岩手県一関市の小岩堅司さんの三十三年忌の法要に吉田と共に招かれた席上、皆さんにみていただいたのですが、和尚さんは長くとも一時間と座っていないのに、この席だけは四時間以上も居られて熱心に見ておられました。

菅野さんの今後の活躍を望みます。

岩手県東和町の薄衣文子さんは、第三揚陸隊の御主人が西部ニューギニアのアルモバで戦死され、終戦後あの通りの食糧事情でしたので、四人の子を育てるため慣れぬ田畑作業に働き過ぎて全身麻痺となり、二十三年以来実に寝たきりの三十年です。吉田の遺骨収集団参加を知って動く右手のただ一本の指で亡き主人を懐く切々たる書面を寄せられました。

ニューギニアで供養をし写真をお届け致しましたが、一昨年立派な家と墓を建て三十三年忌の法要を済ませましたが、全く町の婦人会長にでも推せんしたい程の頭脳の方です。又同町の菊地タエさんの御主人も西部のホーランジャヤからセンタ二湖畔を通ってサルミに転進の際ダンケンで戦死されたのですが、

先に西部に遺骨収集に行つて来られた中垣様からのセンタ二湖畔の美しい小石二ヶを御主人繁美さんの転進途中の足許の小石と思ってお送り致しましたところ、次の文を寄せられました。(文中から)小石をつまみながら私の一言を書きます。

有難うお前よく来てくれたね

小石よ センタ二湖の小石よ

三十四年前お前は知ってるよね

疲れ果てた兵士の

破れた靴を引きづる音

教えておくれ 話しておくれ小石よ

ああ 何も言はない

小石よ センタ二湖の小石よ

そうね 教えたら惨めな女よね

いいのよ 私は何も聞かない

唯じつとお前を見つめる

涙もふかずに 小石よ

亡き夫を懐く切々たる心が伺えます。

「病床に吾子を置いて語り居し曹長は写真抱きて逝けり」これはウエワク地区ボンガリマで亡くなった四四野道第一中隊長の小田島忠之准尉の様を生還者岩淵秀雄君がうたった作です。一粒の米なく薬も弾丸もない自活時代のジャングルはこのようなものでした。

奥さんの奈子さんは花巻市で農業に精を出し、二児を育てその写真の長男忠敏さんが吉田と共に四十七年八月五日この地ボンガリマに至って合同追悼式を行い、母の手縫いの白の肌衣とじゆずを目の丸に包んで埋めてきました。

翌四十八年九月、吉田と菅野さんが遺骨収集に再び訪れ、肌衣埋葬の地点が一米おきに一列に埋葬した一中隊の戦友十二名の埋葬地点だと分つて収骨致しました。そして奥さんから依頼をうけてきた一・三キロの法名を刻

んだ石碑を又埋めて拜んできたのでした。

仙台市の高橋澄子さんは昨年十月末ウエワクに行き、御主人第四航空軍司令部軍医大尉の戦死したアイタペ沖九五キロの洋上に機上から花束を捧げて冥福を祈って来られ、十二月二十日の河北新報に次の文を寄せられました。(一節)

「ウエワクの海岸の砂をビニール袋に入れてもつてきましたところ、中から小さい巻貝が出てきて、孫が「おばあちゃん、貝の中のものが動いてるよ」というので見るとヤドカリでした。私はビックリして水と少量の塩を入れてやりましたら、静かに足を出し、のこのこ歩き出したのです。遠いニューギニアからはるばる仙台まで生きていてくれたのは奇跡とでも言いましょうか。何か主人の霊がいつてきたのではないかと涙が流れてしょうがありませんでした。

一月に高橋さんに御会いしてニューギニアのことを御話し致しましたが、鹿児島からニューギニアまで六時間で無着陸で行けるようになった現在ですので、行って来てよかったと話しておられました。ヤドカリはその後死んでしまったそうですが、白い巻貝は仏前に供え毎日拝んでいるそうです。

数多くの戦友の三十三年忌は終わりました。一人でも多くの戦友をと、岩手、青森、秋田そして山形県を巡りましたが、数えてみれば五七名でほんの一部でした。ただ四十七年に戦跡巡拝慰霊団に加って、翌四十八年には遺骨収集団の一員としてニューギニアに渡り、現地ですり戦友達の御冥福を祈り、又収骨して来たことは永年の念願であつただけに何よりと思つています。今後靖国神社と千鳥ヶ淵墓苑の参拝には引きつづき参り、戦友の御冥福を祈ると共に数多くの御遺族の御多幸を祈って止みません。

五三年二月十九日

現地慰霊

と鎮魂



元第九十兵站病院 富岡伊三郎

「光陰矢の如し」終戦早や三十三年!! 焦土化した、我が国が産業、経済、文化と驚異的な発展に加え平和にして自由、想像もなかった高度な生活、その陰に過ぐる大戦に「七生報国の至誠に徹し遂に吾生す屍、水漬く屍」となれた三〇〇万の殉国英霊と数多尊い戦争犠牲者のある事を忘れてはならないと存じます。唯今特に個人は勿論地域エゴ職域エゴの風潮著しく極一部と言いつら、日本赤軍並びに成田空港の廃港を叫ぶ過激派の破壊行動は当面の原因よりもっと大きい根があるのではないかと憂える者の一人であります。

去る昭和二十五年大阪吹田操車場で一部の学生と労働者が火炎瓶斗争の時でした、四天王寺出口管長さんが暴力行動の人々が悪くないとは言えないが、如何なる結果にも必ず原因がある。この事件は戦争で亡くなった犠牲者で回向供養の受けられない即ち、成仏出来ない霊が過激な人々に憑いて乱暴させているものであり、戦争犠牲者の人々には特に回向供養を十分に慰霊しなければ容易に成仏は出来ない」と話されました爾後体験を重ねました昨今、出口管長さんのお話は全く同感で疑う事が出来なくなりました。と申しますのは昭和二十八年三月十六日、四天王寺出口管長親下の御尽力のもと一山あげての御奉仕に携り、東部ニューギニア戦歿英霊の盛大な慰霊祭を厳修して頂き、毎年心温まる一山あげての慰霊法要の御奉仕を賜り、その間に十六回昭和四十三年の春の事でした。十五回も四天

王寺管長親下導師のもとに盛大な法要をして頂いたのが英霊各位におかれても御成仏の事と考え亦御遺族並びに戦友方の御足苦労を煩す事の御迷惑と察し、以後中止に決定しました夜から「亡き戦友の遺骨を大風呂敷に一杯首から吊下げニューギニアの山々をさ迷う夢に眠れず翌日も同様眠る事が出来ず、是れは英霊の御不足と反省し急いで四天王寺へ例年通りの慰霊法要を御願ひしました処、その夜から不思議に熟睡する事が出来ましたのに家族一同「英霊は生きて居られる」「霊魂不滅」である事を身を以て体験、亦昭和四十四年十月一ヶ月間、五十五名の戦友会の皆さんと現地慰霊並びに遺骨収集事業に参加させて頂いた際、指定されたソナム方面の第一夜のバラム海岸ギリゴモ部落に宿泊した暁方前に、「亡き戦友が急に半身を起し早く枕経をあげんか、早くお経をあげて呉れ!!」と夢枕に絶叫されたので「ハイハイ」と答えた夢の中の自分の声に驚いて跳ね起きると同時に班員全員が何事だ!! 今大声で叫んだのはと全員を起してしまい夢枕の状況を話してお詫びしました処班長の藤井玉一さんが斯くある事もあるう。

此処は守備隊五〇〇名の方が玉碎された場所である!! 時に十月八日午前五時、外はまだ暗く夜明けを待つて、お茶をわかし持参せし祖国の品々を供えて一同一心にお経を唱えて御回向申し上げた次第です。

又四十六年七月全国より十二名の皆さんと共に慰霊収骨の際も帰国の前日、ウエワクのホテルに於いて、帰国準備中夕方より歯痛にて食事出来ず鎮痛剤を服用するも効果なく夜十二時を過ぎても眠れず、隣室の御遺族も点灯中で何故か寝られないとの由、省みると今日はまだ回向していないのに気付いて皆さんと共に御経を唱え回向を終る頃には不思議

にも歯痛は全快して朝七時過ぎまで安眠が出来ました。偉大な御経の功德に感心した次第です。

尚昨年十月二十二日よりの三十三回忌、現地慰霊巡拝団に近畿地区より十二名の御遺族、戦友方とA班(ラエ、マダン、ウエワク方面)の三十二名の皆さんと共に「ラエ海岸の妙高丸沈没場所に於いて日友好協会の梶塚さんが妙高丸は全員上陸後、敵空爆により沈没せるもので犠牲者はないと説明されたので、一同安心して同海岸に於いて昼食(弁当)を共にして記念撮影の際、近くに昭和五十二年八月二十一日建立の新しい桧(四寸角)の日本軍戦歿将兵の慰霊碑があり乍ら、慰霊もせず次ぎの「ラエ合同供養塔前に於いて、御回向をしてホテルに帰ってから「ラエ海岸で、小さいブヨに咬まれた跡が痒くてたまらず、痒み止めも効果なく、夜になっても痒さで眠れず、一行の皆さんも同様に咬れた筈が、誰も異常を訴える人はなく何故私一人がと反省し、妙高丸横に慰霊碑を知り乍ら、回向しなかつた事に気づいて同室の御遺族竹島秀一様の御協力を得て、真夜中前三時にお詫びと共に一時間余り御経を唱えて回向を終ると、不思議に痒さはなく午前八時前まで安眠する事が出来「マダンへの巡拝、翌日は「ウエワク方面への巡拝に皆さんと共に一心にお経を唱えて全員無事に目的を達成して帰国いたしました次第です。

さて、現地慰霊の度にお叱りを受けた事を考えます時、素人の私如き者の唱える御経でも御受け取り頂ける事は、戦後三十有年の今日尚、ニューギニアの地に於いて、祖国よりの慰霊の御経とお迎えを鶴首お待兼である事を痛感する次第であります。

戦友並びに御遺族の皆様には御願ひ申し上げますが、なんと

かして一人でも多く現地慰霊に携り殉国英霊の鎮魂を以て戦後の終結と真の平和国家を念じて止みません。

合掌

追伸

昨年十一月の巡拝団にA班三十二名中、福岡県の御遺族で八十才の浦スミ様と七十九才の山口ミサノ様が御老令を以て、はるばる遠いニューギニアまで慰霊に参加されました尊いお姿は唯々敬服の外ありません。浦さんは、杖とも柱とも頼む一人息子さんがウエワクで戦死され、今は一人で農業をして居られる由承り、又B班の中に片足を大腿部より切断された戦友の方が、松葉杖でラパール方面の慰霊に参加されましたお姿に、頭の下る想いと共に亡き戦友の英霊におかれては、どんなに喜ばれる事かと目頭が熱くなるを禁じ得ませんでした。

彼我戦争犠牲者の鎮魂なくして真の平和はあり得ない事を確信する者であります。



軍艦旗と私

海軍 和田喜一



其の一

それは三十余年前の昭和十九年一月下旬、「ガリ」転進の話である。東部ニューギニアの標高四千メートルのサラワケットの山越えに続き、今、此の山中で高熱と疲労の為、精根尽き、土人路の草蔭で私は寝ていた。中隊長伝令と云う重任にある私は軍艦旗を八つ折りにして紐で腹に巻いていた。だが衰弱し切った私は転進して行く陸軍兵に追越されていた。中には怪訝そうに「海軍さんか」と呟いて通る兵もいた。丸腰の病兵が飯盒を一つ腰に下げて杖を頼りにトボトボと歩いて来て、私の前に立止り生死を確かめている様だった。私が「まだ早いよ」と云うと、驚いて「失礼しました」と云って急ぎ立ち去って行く。何時迄も寝ている事も出来ず重い腰を上げて、本隊へと急いだが追従する事が出来なかった。その道筋で熱発で困っている兵にキニーネを分けてやった処が、数日した或る日、谷川で炊事中の陸軍兵が私を見付けて「海軍旗の海軍さん、先日は薬を戴いて有難う、お蔭で元氣になりました。一杯どうぞ」と差出す飯盒の蓋の中は山の香がする茸汁であった。あの美味しい味が今に忘れられない。

其の二

それから私も元氣になり、時には上衣を脱いで歩いていたので腹に巻いた軍艦旗は目立っていた。その頃二人の陸軍の病兵と知り合い行

動を共にする事になった。彼等の部隊は、マダン地区にある独立工兵隊とのことで佐賀県の出身者であった。その一人の矢田一等兵は身長は五尺二寸位で面長の顔で顎が長くよく喋り、郷里では大工をしていたとのことだった。残る一人の宮崎一等兵は五尺四寸位で丸顔の無口な方だった。踵の後の靴擦れが化膿して痛そうにして歩いていた。此の三人の奇妙な組合せの道中が始まった。軍艦旗を腹に巻き、小銃を持っている海軍上等兵を陸軍工兵一等兵二名が帯剣丈の姿で護衛するかの様に行進した。これを見た陸軍部隊の中隊長の大尉殿が「お前達は何者か」と尋ねたので、私はすかさず「ご覧の通りの落伍者の協力班です」と答えた。この返答にあきれたのか、件の大尉殿は「ああそうか」との一言で後は何も聞かない。部下の兵隊達も苦笑して見送っていた。

其の三

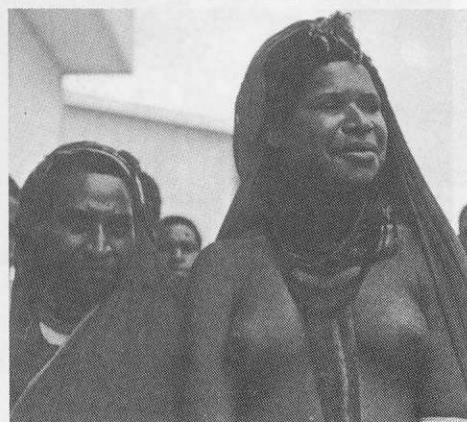
間もなく小休止中の陸軍部隊に追いついた。その部隊は軍旗を道の真中に立てて、我々が近づくや否や傍の旗手の少尉殿が仁王立ちとなり日焼けした顔をこわばらせて大手を広げて「こら!! この軍旗の前に出てはいけない」と怒鳴り先へ通して呉れない。そこで私は咄嗟に上衣を開きボンと腹を叩き「こちらは軍艦旗だ!! 本隊が先に居るので急ぎます」と



やり返した。すると威張っていたその少尉殿は急に態度を変え「さあー、どうぞ」と道を開けて通して呉れた。私は後の両一等兵に、「さあ行くぞ」と声を掛けて前に出た。後に続く二人は驚き乍ら通り過ぎ「今の少尉ボカんとしちよったたい」と安心笑をしていた。胸のすく場面であった。

其の四

敵上陸地点に一番近い部落のヨカヨカは三百米先の山頂に見える。登り道が急で一息入れておると海岸方向から飛行機の爆音が聞えて来る。其の音がだんだんと近づいて空襲となった。私達も木蔭に身を隠し、様子を見ておると頂上の部落では陸軍部隊が炊事の最中だった。敵機はこの部落に突込み黒い一升瓶の様な物体を落した。それがフラリフラリと落ちて来た。始めて見た物体だ。爆弾ではないと判断した。土人部落の中央や家に当たったらしい。にぶい音と共にバアと黒い煙が出てたちまち火の海となり油に火が付いたような臭いがした。自分なりにこれが焼夷弾と云うものだろうと思った。十分間位銃撃を繰返していたが去って行った。私等は今の中に急ぎ部落を通過しようと頂上目差して息をはづませて登って行った。そこには悲惨な光景が展開していた。死傷者多数が全身血だらけになり、溝や家の中から、うめき声が聞える。戦友達は救助に走り廻っている。今、飛び去った敵小型機は勝誇ったかの様に遥か眼下の飛行場に翼をひろげて、休めているのが見える。其の前方に敵上陸地点のグンビ岬と青い海原が眺望され、その美しい景色は一生忘れられない。だがラエ警備当時に敵に向け砲撃したあの高角砲でも一門頂上に備えてドカンドカンプツ放してやりたい程の憤りを覚えた。我々は残念乍ら三八小銃一挺では如何とも為す術もなかった。



此の部落の農園は敵軍が近間に見えるので転進部隊は急ぎ通過する為か余り荒されていない。珍しい野菜や豆と沢山採って久しぶりに満腹にした。翌朝は敵機の来ぬ間にと早立ちし、足も軽やかだった。崖の上に出た。右側は谷となり素晴らしい山の眺めに我を忘れて腰を下した三人は昼飯だと飯盒を開いて食べ始めた。すると向い側の山の敵陣地から私達に向って猛烈な砲撃を加えて来た。驚いた事に陸軍部隊が警備している陣地の上であった。附近には蛸壺が沢山見え、警備の将兵も食事中だったのか、林の中から押取刀の小隊長が飛び出して来て兵を配置に就かせている。そこで、私は尋ねた「陸軍さん、何時も此の様な事がありますか」とすると「敵が攻めて来るから早く此の先に釣り橋があるから坂を下りて渡って下さい」と走り去った。私は「さあ急げ」弁当を半分やめ滑る様に崖下に駆け下りた。そこには奇岩が多く溪谷、深山を思わせる処である。激流が岩を咬み物凄くゴウゴウと流れている。川幅は十米位はある。切り立った淵は八米位で、其処に竹の釣橋が立木から向う岸の立木に掛けてあるが、砲弾の

為半壊になつてゐる。竹梯子を横にした様に、我が転進兵を対岸に渡れない様に阻止してゐるのだ。益々集中砲火は激しく前後左右に撃ち込み轟音は落雷の如く、其の中を先づ、矢田一等兵を渡し、続いて私も横這いになつて渡つた。対岸の大きい岩陰に飛込み二人は上流に向つて岩陰から岩陰へと走つた。そこから草原の山に登る道になつてゐた。其処で私達二人は長い間、宮崎一等兵を待っていたが遂に姿を見せなかつたのは残念であつた。あの釣橋を渡つたのは私が最後であつたのではないかと思う。其の後、草原の山に向つて行つて又もや敵の機銃の狙撃を受けたが、奇跡的にその草原を突破し、山頂のシクタマ部落に辿り着き肩を叩き合つて無事を喜んだ。うれしさの余り汗にまみれた軍艦旗を解いて思い切つて振りつづけた。其の後、二月末にマダン半島にある矢田一等兵の本隊に着き、無事を折りつつ別れた。矢田一等兵の其の後の消息は全く解らない。

其の五

私は軍艦旗を守り急撃本隊を追及しなければならなかつた。四月末ボーイキンに到着したが本隊は既に、アイタベ以西に転進していた。米軍のアイタベ上陸に因り八十二警隊員の残留隊は追及不可能となり、カイリル島に渡り、二十七特根に編入された。

此の五ヶ月の間、私の肌に付け汗と油で煮しめた様な軍艦旗は、開戦当時から舞二特、八十二警と共に各戦場を駆けめぐつて来たが、二十七特根編入と同時に遂に別れる時が来たのだ。十九年五月上旬、八十二警隊員数名が見守る中、寂しく涙ながら焼却した。挙手の敬礼も手がふるえ、私の脳裏は、そして胸中は複雑な思いで一杯であつた。

軍艦旗をめぐる過ぎし日の数々の想い出を辿つて記しました。



私のニューギニア訪問

四航情 金子謙吉

人生での最も血気盛んな時をあのニューギニア戦線で過ごし、幾多の戦友を失ない九死に一生を得て還ることのできた我々にとつて機会があつたら再びニューギニアを訪ずれて亡き戦友を葬い、あの当時、世話になつた現地の方々にお礼をいいたい、という事はおそらく誰れもが念願している事だろうと思ひます。

ウエワクから西の海岸自動車道はブーツの少し先までしか行けず、それも小さい川は橋をかけず道路の上を流れっぱなしにしていますから雨の後には注意。

ウエワク→マリックは車で三時間、マリック→マルイは一時間。セビックはカヌーに船外機をつけたのが走っており、マルイからバルンベまで四〇キロの下りを一時間半で行つてしまつた。(料金三十五キナ)

バルンベやマリッケンは今や彫刻師の村、昔からそうだったのだらうが、あの当時は日本の兵隊に食わせるのに追われ、それに銃爆撃のどばつちりを受けて、それどころでなかつたんでしよう。今は主に年寄りを中心に、シンシンハウスの土間に蚊遣りを煙しながら彫り物に熱中している姿が見られます。

相変わらず蚊の多いのは参つた。日中、歩いていても平気で食いついて血を吸つており、鈍いというか、ずーずーしいというか、夕暮時は特に多くなつて落着いて食事ができず、案内のボーイからもセビックは蚊が多いのでいやだというのを私の蚊帳へ一諸に寝ることにして連れてきて、本当に一人用の蚊帳の中で背中をくつつけて寝てきた。

主食は相変わらず、焼サクサクが主食だが、副食は鮓に似た二〇センチくらい魚の燻製を五匹くらいつけてくれて、これが本物の燻製の味ですばらしくうまかつた。

マリッケンの村端にはマラリヤで亡くなつた渡辺軍曹を埋めてきたのでそこを訪れたら、道が三十二年前とちつとも変つておらず、埋葬地点はすぐに解つたが、ただ目印の二本の細かつた木が物凄く大木になつており、案内の土人と二人でその木の回りをたしかにこの木の間に埋めたはず、とうろろしてゐたから部落の年寄りが現れて、確かにそこへ埋めであると言ふ。日本から誰れか来て骨を持つて帰つたか? と聞くと、あれ以来ここへ日本人が来たのはお前が始めてだという事、勿論骨もそのまゝになつてゐるだらうと、その大木の根元に線香、ローソクを供えて供養した。するとその年寄りがこつちにも一人、そつちにも一人と、この埋葬地点から十米ばかり離れた所を二ヶ所案内してくれたので、それぞれ回向を手向けてきた。

この村にも日本の兵隊を埋めた所はないかと聞くと、一人が案内してくれて、道脇の土手に五体、平地に一体埋まつてゐる場所を案内してくれたので、それぞれ供養をし、その中の一体は土手の土が崩れて骨の一部が露出してゐた。

このバルンベの村はNo一からNo三まであつて、その上にジャンウッドというビッグキャブテンが居り、附近の村を含めて掌握し、日本軍に協力してくれていたが、戦後豪洲統治になつたら十年の禁固刑を受け、刑期が終えてから、一時村へ戻つたがすぐにラバウルへ帰り、今もそこで生活しているという。

同じようにマルイを中心としたセビック地区ではメンドン(ヤジャマンゴ)マンバ(コログウ)のビッグキャブテンも十年の刑を受け、マンバは亡くなつたが、メendonは、やはりラバウルで生活しているという事だつた。本当に気の毒な事をしたなという他なかつた。

マリック地区の昔の自活地区ベンガラグン、チャイキスにも泊つたが、我々の居つた頃は男も女も素裸だつたこの地区にも、今はすっかり衣類がゆきわたり、男は半ズボン、女はワンピースか、スカートを付けてゐる。ウエワク→マリック道路によるこの地区の文明の浸透力は大い、昔はむしろ文明度の高かつたマダン地区のシグが、険しい立地条件によつて旧態然としてゐるのに、こつちの方が進んでいる様に感じた。

物質文明はたとえどうあろうと、このニューギニアの人々の純朴さ、美しい人情は、何時までもこのまゝであつて欲しいと願わずに居られない。私の今後の旅は懐かしい田舎の親戚を訪ねた、といった気分だつた。

紙面の都合に依り訪問記前半を割愛しなければならなかつたことをお詫び致します。

—おわり—

追悼 (著名戦友)

元第二十七野戦貨物廠長

酒井 弘 策 様

元十八軍兵器部員

天野 一 雄 様

元第九艦隊第十八軍参謀

岩 城 繁 様

元第一〇二連隊長

堀 慶二郎 様

謹んで哀悼の意を表します。

岩城参謀を偲ぶ

海軍東部ニューギニア会員
前参議院議員 黒住 忠 行

昨昭和五十二年は、終戦後三十二年、いわゆる三三回忌に当る。私は、十一月二十二日から二十九日にかけて、東部ニューギニア慰霊団の一員として、遺族の方々、戦友皆様とともに参加させていただきました。

各班にわかれて、それぞれ、ゆかりの地において慰霊祭が執り行なわれた。私が七根司令部先任参謀であられた岩城繁海軍中佐のもとにあった思い出の地「ラエ」、ブス河河岸において慰霊祭を行なった。今や亡き岩城さんに謹んで御報告致す次第である。

十一月二十三日に、ポートモレスビーからラエに。今では、ジェット機で約四十五分の航程である。標高三千米を越すオーエンスタンレー山脈を眼下に見下す。

昭和十七年七月からモースビー攻略作戦が開始された。南海支隊を主力とする日本軍は、九月には、ポートモレスビーの灯が遠望されたといわれているイオリパイワ東西の高地を占領したが、進撃は、ここで終わったのであった。続いて、「ブナ」の死斗となるのである。

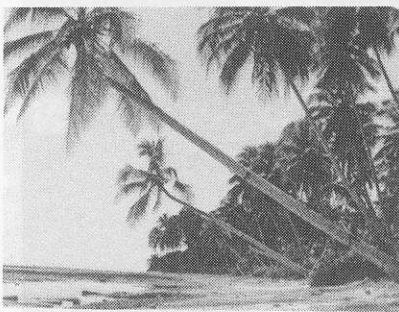
昭和十八年一月二日には、横五特司令安田海軍大佐(海軍中将に二階段特進)が戦死され、そして、一月二十日全陸海軍が「ブナ」を総退却したのであった。「サラモア」「ラエ」が第一線となった二月に、私は、七根司令部として「ラエ」に着任した。

間もなく、第五十一師団の主力と海軍部隊を「ラエ」に増強し、ダンピール海峡の守りを固めたとき第八十一号作戦が、三月一日の敵機の上空襲により挫折することになった。八十一号作戦で傷ついた生き残りの五十師団を主力とする陸軍部隊、七根司令部を中心とする海軍部隊、この方面の戦勢の挽回を期して頑張り続けたのであった。

岩城繁海軍中佐は、無着参謀の後任として七根司令部参謀に着任された。

戦況次第に急迫し、九月三日夜半から敵のブス河河口上陸が開始された。次いで、五日敵大飛行機群は、ナサブ平原(現在の「ラエ」の主飛行場となっている)に飛来し、天を覆うが如き落下傘部隊の降下を開始したのである。

陸海軍一万余名、「ラエ」を死守するか、転進して「マダン」に向うか。岩城中佐の心中どうであったか、察するに余りあるのである。



間もなく、大東営の転進命令がなされた。敵上陸後新しく着任された森司令官を補佐して、陸軍と密接な連繫計画のもと、「サラワゲット」越えの転進作戦が展開されたのであった。

「サラワゲット」越えは、予想より遙かに日々を要し、その困難たるや言語に絶した。岩城参謀は、終始沈着冷静、士気を鼓舞され続け、この苦しい転進作戦を成し遂げられたのであった。ラエ・ケメン・アベ・サラワゲット・ギラン・ワツプ・ウラツプ・キアリと、百里の道一ヶ月、終始行をともした。

その間、「フインシユハーフエン」方面の戦況は、次第に切迫の度を加え、われわれは「シオ」において、洞窟の生活が始まった。

十九年一月一日、洞窟で、最後の正月を祝った。工藤司令官、岩城先任参謀、今中軍医長、松尾主計長(前任の河野主計長は転進中戦死された)、池田軍医中尉、黒住忠行中尉と司令部の面々であった。

二日に、敵の大輸送船団が、目の前を通過し、グンビ岬に上陸することになる。腹背から敵の迫る状況となり、遂に陸軍安達十八軍司令官、海軍工藤司令官に随行して岩城参謀達は、急ぎよ、「マダン」で全軍の指揮をとるべく潜水艦に乗って出発した。私は、陸海軍将兵ともどもグンビ岬上陸地点の上方を迂廻して「マダン」に転進することになる。

ニューギニア方面では、終戦の日まで凄惨な戦斗が続いたのである。

岩城参謀は、最後の最後まで、東部ニューギニアにあつて任務を遂行したのである。

戦後は、亡くなられるまで、海軍東部ニューギニア戦友会の代表として、慰霊、遺骨収集、意義深い記念行事の実施、大変お骨折りを賜りましたことに對し、深甚の謝意を表し、謹んで御冥福をお祈りする次第である。

海軍陸戦隊南十字星の下に散華

(参謀 岩城繁大佐の思い出)

新千里病院院長 吉岡 観 八

はじめに

*サラモアの死斗



空も砕けん砲撃に
ラエ、サラモアはすでになし
プシの流れは血に染みて
ロカノの丘に夕陽は沈み
残る梢の花一つ

偲ぶも悲し戦友の傍

この思い出は、僅か終戦前の一年有半にわたる東部ニューギニア戦争の一頁を飾る海軍陸戦隊敢闘の綜説的な記録の一節であり、主として岩城参謀を中心とした思い出である。

ニューギニア戦争の史実をつぶさに知り、そして戦争の悲劇を語りつぐ南十字星は、巨火をかかげて今もなお永久に南の空に変わることなく輝き、南海の島に眠るわが戦友に、永遠なるものは何かを問いかけている。南十字星こそは、すべての戦士の心の古里であった。何故ならば、陸海あわせて十四万数千の東部ニューギニアの日本軍はその九五%がこの地で無念にも消えていったのである。彼等は一日の戦いが終った夜、眠られぬままに苛烈な戦いのあと、散つて行った戦友のことを偲び、又明日の命を考え、望郷の念に浸り、束の間の生を惜しみ、永遠なるものを求めて皆鬼籍に入ったのであるが、これら兵士の唯一の心のなぐさめが南海の澄みきった空に閃くあの南十字星であったからである。

*大河セビックの月

南十字のまばたきて
千古を秘めしセビックに

滔々島は流れゆく
石期の土人の操りて
邁行るカーヌの鮮やかに
銀河を渡る月皎し



再び岩城参謀との出会い

岩城参謀とお会いしたのはボーキン溪谷が三度目である。一回目は、ラバウルから潜水艦でニューギニア東部のシオ地区に上陸して、断崖の岩窟に設けた第七根拠地司令部に着任の挨拶に行った頃、次は約五〇〇？ 軒行程フィニステル山系を西に踏破してマダン地区のナガタに駐屯していた七根司令部に報告に行った時、そして昭和十九年四月ウエワクの西ボーキン地区でお会いしたのが三度目であって、この時から終戦帰国まで、いや昭和二十五年戦後GHQによるわが隊関係の戦争裁判終結に至るまで度々お会いしたが、私は常日頃、氏の人柄を大変敬愛していた。特にボーキン以降の作戦では毎日のお付き会いで岩城さんの垢抜けた軽妙洒落な参謀らしい海軍士官振りは旧七根陸戦隊員の信望の的であった。当時、滋賀秀正軍医少佐はカイリル島勤務となり、本土の高級士官は第八二警の軍医長をしていた、近藤実軍医少佐、高砂義男隊の軍医長板倉大尉、戸島大尉、サラワゲット越えをした池田亀夫軍医大尉に私と、部隊長の柿内大尉、三野大尉などであった。岩城さんは案外健脚で、ボーキン駐屯中にアチコチの地系を偵察したり、十八軍軍司令部との連絡参謀としても走り廻っていた。又、大本営参謀当時の広範な基礎的資料に基づいて今次大東亜戦争の趨勢を客観的に判断し、マキン・タラワ玉砕、ホーランディアに第九艦隊潰滅、サイパンの悲劇、ビアク島陥落後にくるべき敵の作戦をハルマヘラ、フィリッピン

の島々、沖縄侵攻、本土久里浜上陸など一本のローソクの明りに土官室で私どもとよく駄べったものである。又苛烈極まりないアイタベ作戦の最中にもすでに彼は、戦いの帰趨を予期し、生残った一万の日本軍を收容し、自活と作戦の可能な肥沃の適地を求めて自ら偵察し、全軍玉砕に至るまでの新たな戦場としてアレキサンダー山南地域を候補にあげていたものと思える。アイタベ作戦は結果論かも知れぬが、三万の日本軍の食糧をまかなうことが出来ないで、せめてその可能な見透しである一万人にこれを減らすべく、その大義名分をたてるための戦斗とまで批判された。いづれにしてもニューギニア本土に戦った海軍陸戦隊が比較的多く生存出来たのも、又健康な判断力をもって常に意気軒昂と作戦出来たのも一ツに岩城参謀の鋭知と気略、性格と手腕によるものと私は思うのである。

カイリル島紀行

或る時、私は従兵を連れ岩城さんとカイリル島の二七根司令部を訪れた。第十八軍司令部のあるヌンボクを更に東進して未だ敵の上陸していないウエワクの展望台に立ち、機銃掃射や爆撃で醜くく折れた椰子樹林の間からウエワク半島、更に遙か北の方日本の方向に幽むボケオ島(望郷島とも)を眺め、しばし瞑目した記憶を生々しく思い出す。半島の岩陰に潜む第五船舶工兵隊の大発に便乗して夜陰に乗りカイリル島に渡った。司令官室に電線が這い豆電燈がついているのに驚き何だか日本に帰ったようなホノボノした文化を感じたことである。久振りに滋賀さんを始め同期の境野、皆川軍医大尉らと軍医学校卒業以来の旧交を温め、当時カイリルの北海岸に敵前上陸した勇敢な敵の決死隊の話などを聞いた。島の山頂に立ち北の方大海原につづく日本を懐しみつつ、陣地構築や北海岸を視察。数日の滞在で用件をすませ、もはや再会を期待出来ない滋賀さんらと別れを惜み、夜陰に乗り

て再び舟艇の人となった。岩城さんと満天に閃く星屑、南十字星を眺めながら遙かに横たわるニューギニア本土の奥にそびゆるフルン山の南にやがてくり展げられるであろう死斗をも忘れて詩境に遊んだ。暗黒のボーキンに再び上陸した我々は、アチコチに点在する焚火に不審感をもった。夜目ながらボーキン海岸はすでに日本軍が撤退し大変荒廃し、廃虚と化しているように直感した。アイタベ方面からの敗走兵の屍が随所にある筈である。敗残兵が屯して談笑しているらしい様子に事情を調べようと話し合ったが危険を感じ、こ

れらを避けてボーキン溪谷のほとりの旧兵舎の近くで野宿仮眠した。この頃、この辺りは一入で遙く落伍兵がつぎつぎと彼等集団に撃たれているとの噂が流れていた。

マン・カイカイと称する敗残兵の人喰いについて、早くから「ヨガガの妄者」などもその一ツのケースである。とも角、この小旅行を通じて岩城さんと人間性のふれ合いが出来たのは懐しい思い出であり、又収獲でもあった。

望郷

椰子樹に倚れば南風吹き
葉づれの音はササ鳴りて
ボケオ(島)は霞む夕まぐれ
しばし故郷を思ふとき
しづかに触れしコスモスの
紅き花びらがこぼれ落つ

岩城参謀マリアの脳症

第十八軍安達部隊(猛軍)は海軍陸戦隊共々全軍いよいよ玉砕の危機に直面し、かつての平和なニューギニア・アレキサンダー山南地域は戦争の惨禍に巻き込まれて戦斗と陣地構築と潜入爆破攻撃などの戦場と化してしま

った。日頃我々すべての兵隊が尊敬し、敬愛していた岩城さんは、第十八軍軍司令部との連絡も密で常に新しい情報を持ち、又戦争の大局にも明るく持ち前の英才と俊敏さと、明朗さで我々に多くのその情報を提供し、特に勇氣と希望と明るさを与えて士気を鼓舞された。然し、戦況は更にますます苛烈になって日本軍は四囲を完全に包囲された。ヌンボクの軍司令部を側背から直接覗くようにウエワク展望台方面から砲声は一段と熾烈に、又南ウィップ部落草原に落下傘部隊が再降下したのか？ 近接するわが堀部隊のホイ地区に敵軍が出没し、西マブリック方面から侵攻する敵軍と一隊になって、軍司令部に最短距離で直結する本道キヤリブ部落に隣接するヤンゴール飛行場をアツという間に奪取した。陸戦隊本部はフルン山の山腹エンボガンディアに位置していた。そして急坂や断崖を利用して敵の側背にあたるこの山腹から眼下に見下ろす敵陣地と相對峙し激戦につぐ激戦が続いたのである。

この頃、エンボガンディアの土官室に不思議なことが起きた。マリアの高熱の時とか、又この患者にアテプリンの注射をするときよく脳症を起したのであるが、別に注射もしないのに岩城参謀の起居動作がどうもおかしいのである。病態を確め診断をつけるために氏の居室の床下にかわがる土官がもぐって動静を観察した。氏は、誰もいない自室でいつまでも眠りもせず、ブツブツ独り言をいつている。彼が最も親しくしていた近藤軍医少佐が彼のところに行つて話しかけたら、診察をしましょう。といつても全くとりつくひまがなく、あぐくの果は「殺してやる」といつて拳銃で近藤氏を追い廻す。柿内大尉が行つても同じことで怒ったり、取り乱して彼を追い廻すという状態が続いた。恰もマニカシソフレニの状態といわざるを得ない。愈々熾烈極まる決戦という時に海軍部隊の与望を担

っている岩城さんの気がふれたのだから部隊は憂色に包まれ、みな困惑すると共に診察治療も出来ず処置に困った。敵の砲撃はアチコチの至近距離に炸裂し、私たちも愈々命旦夕に迫った或る日、即ち昭和二十年八月十六日朝から猛砲爆撃がピタッと止み、午後数機の敵機が飛来して、日本無条件降伏のビラをまいたのである。

九月に入ってから日本軍は投降のため、順次ボーキン海岸に向けて山南地連を出発することになった。

かくて海軍部隊の投降は如何にすべきかが合議され、特に未だ脳症のさめぬ岩城参謀をどう扱うか幹部は頭を悩ました。一刻も早く飛行機で病院に護送してもらおうかなども論議されたが、いずれにしてもボーキン海岸に護送せざるを得まいということで、偶々その任を私が受け持つことになってしまった。

九月中旬の或る日、私たちは先発隊として従兵と土人を伴い岩城さんと同道ボーキン向けエンボガンデアを出発した。岩城さんは分ってか、分らずか、未だにビントの狂った状態のままフルン山頂に向って行ったのである。

私たちは山頂に立ち再び望見することのないであろう、今までの戦場であつた大河セビツク、ハンステン山系に至る広漠たる大平原を望見し、山の空気を全部吸いとりようなりラックスした気持ちで深呼吸をした時ほど生きていることの喜びを感じたことはない。そして岩城さんの病状を気づかいながら、ワンヂヨ部落に向って下山していった。岩城参謀が一時も早く正気に返れることを念じながら、下山途中の雑木林で日はトツブリ暮れてきたので急ぐ旅でもないから山中で野宿することにした。南緯四度とはいえ一二〇〇米のフルン山中の深夜は、特に冷えぱくとして

霜がおり大変肌寒かった。

楷火にあたつて暖をとり、濡れた地下足袋を乾かしつつ雑談をしていたところ、岩城さんが「軍医長！ 私は今まで何か変なことはなかったか！ 自分がどうもよく分らん」と突然、然しシミジミと私に問いかけてきた。実は私は岩城さんの病状を仔細に観察しつつ行軍していたが、次第に少しづつ様子に変化してきているのに気がついていたので、この時「シメター」と思った。深山の冷気にふれて何とか精神の転換がはかれることを期待していた私は、岩城さんにボツボツと彼の病状を、又戦況を説明し、現状の行動と今後の予定などについて話した。氏の頭は再び混乱の世界に逆もどりかけたり、又理解力を一層深めかけたりしていた。

そして「どうもおかしい」と繰り返しているたようである。然し、私はもう！ 大丈夫と考えその夜は早く就寝してもらった。翌朝か

ら氏の頭は次第に正気に復し、だんだんと明晰になってくるようであった。『どうも皆なに迷惑をかけたようだな！』とも述べられた。これから愈々投降という前代未聞の行動をするにあたって、氏が正気にかえられたことは一〇〇万人の味方をえた感じがして一同の足どりは次第に健調になって、数日後いよいよ熱帯の太陽が燦々と降りそそぎ、草いきれのするボーキン海岸の草原に出た。

＊玉 碎

セビツクの河原(カハダ)くハゲンの山嶺(カハダ)高しカラマンボ湖は閃きて南十字を映すとき永久の歴史を飾りなむわが功を語るべしわが績を伝うべし

S 53・3・29

八 幹

編 集 後 記

終戦となりムシユ島から引揚げ祖国に帰還してから三十二年になりました。その後は荒廢した戦後の建設に、我が身自身の生活に、ニューギニア当時の苦難を忘れることなく努力した甲斐あって、国は立派に立ち直り、日常不自由ない現在を謳歌出来ることに感謝していますが、飢餓と困苦と戦場との三重苦に戦い斃れ、異国の地に眠っている戦友の方々に申しわけないという気持は、忘れることが出来ない毎日であり冥福を祈らずにはいられません。毎年各部隊会ごとに行われている慰霊祭及び戦友会もその気持の具現であり、何処の会場でも故人を偲ぶ語で夜をも徹しているようであります。

どうやら無事に帰ることが出来て今日ある私達の気持を親睦の意味も含めて活字にし、皆様へお届けしているのがこの会報であります。

一号発行当時は線香花火で長続き出来ないのではないかとと思われましたが、どうやら九号まで発行し続け生存戦友達の親睦の誌として定着しつつあり、寄稿者も毎号倍増して誠に嬉しい限りであります。私たちが体験した戦争の悲しさ、極限のニューギニア戦の容相を子孫に伝えながら現在の平和な世の中がいつまでも続くよう、皆様がたとの親睦と慰霊のためにもこの会報を長く発行し続けたいものであり、今後とも大いなる支援と御指導を希う次第であります。昭・五三・四 後藤記

昭和五十二年五月一日発行

「東部ニューギニア戦友会」会報 第九号

編集発行人 後藤 友 作

東京都世田谷区砧六丁目三十二番一五

電話 東京(〇三)四一六六五〇四

発行所 東部ニューギニア戦友会事務局

振替口座 東京六一七五一四三三

東部ニューギニア戦友会 昭和52年度 収支報告書

昭和52年12月31日

収入金額	科 目	支出金額
2,839,695円	51年度より繰越金	
109,750円	雑収入(預金利子)	
50,000円	寄付金、その他	
	51年度諸経費	605,485円
	預金現金在高	2,393,960円
2,999,445円	合 計	2,999,445円

昭和52年度 諸経費内訳

科 目	内 訳	金 額
会 合 費	世話人会合費用	31,375円
補 助 費	現地慰霊団案内、他	500,000円
通 信 費	各地連絡通信費用	41,560円
発 送 費	会報、他郵送料	2,620円
献 灯 料	靖国神社初穂御霊祭	8,000円
慰 霊・弔 電 費	各地慰霊祭・弔電 7件	5,980円
雑 費	除幕式 2件、他	15,950円
	計	605,485円
	53年度へ繰越金	2,393,960円

●昭和53年度以降の予定と予算

- A、現地ニューギニア地区に日本政府で慰霊碑を建立する計画でありますので、当戦友会より¥1,000,000の協賛寄附を予定しております。
- B、昭和54年度執行の予告を含めた会報9号発行で、印刷費、その他で¥500,000を予定します。
- C、合同慰霊祭執行についての諸費用、その他、当戦友会には、会費その他固定した収入がなく、過去の取骨事業時に皆様より協力を頂いた尊い寄附金の余剰金と会報発行等に深い理解を示して下さいの資金で運用致して報告申し上げます。